

つい先日、私の大学時代の恩師である勅使(てし)先生からお手紙を頂きました。実はこの度、僭越ながら私が編著者として2年近くかかって執筆してきた(保育士等キャリアアップ研修テキスト)『幼児教育』が、ミネルヴァ書房より出版されることとなり、恩師である勅使先生にも読んで頂きたいと思い献本していたのです。勅使先生は、じっくり読みこんだ上でご自身のご感想とお考えを送って下さいました。そのなかで、子どもの「ヤッパリ デキル ヨウニナリタイ」という心からの叫びを保育者(大人)がしっかり受け止め、共に行動を示すことが大事であり、同時に保育者はプロとして、子どもが「その子ができるようになるためにはどのような『指導』(啐啄と同じ意味で使用)計画を立て、実施するか」が求められているのではないかと改めて気付かせて下さいました。

「啐啄(そったく)」「啐啄同時(そったくどうじ)」というのは、中国の仏教書「碧巖録」に書いてある言葉で、「鳥が卵からかえるとき、雛が殻の中からつつくことを啄(たく)、親鳥が殻の外からつつくのを啐(そつ)といい、その双方の呼吸がぴったり合って初めて成功する。つまり、早く子どもを殻から出そうと親が早くつつきすぎてはダメ、子どもが中からつつき始めたのと同時に親も外側からつついてやると雛はうまく殻を破って生まれてくる事ができる」ということを意味しています。

保育や教育、子育てにおいて、この「啐啄同時」がとても重要なのです。わが園では、子どもが主体として生き生きと過ごせることを目標に、子どもたちが意欲的に思う存分遊び、興味のあることにとことん集中して取り組むことができるようにと願っていますが、傍からみると、「単に自由放任にしているだけではないか」と見えてしまうかもしれません。しかし、「指導」をしていないわけではありません。「指導」という言葉をあえて使わないようにしてきたという面もあります。それは、「指導」という言葉に対して、子どもの思い、気持ちを無視して、大人が一方向的に何かをやらせたり、押し付けたりするイメージが少なからずあったからです。ですが、「指導」という言葉の本来の意味は、私たちがイメージしてきたものとは違っていました。

「指導」というのは、一般に「教師が一定の目標に向かって指さしつづけることによって、子どもを能動的に志向し表現する主体として導くことであり(中略)、子どもの内面に割って入り変革することをその本質」としている。そして、「どのような指導行為も、それが注意することであれ、指示することであれ、子どもの内面にとどき内面をゆり動かし、共感と意欲をよび起こすものでなければならない。したがって指導とは、子どもの内面に介入し子どもを意欲づけ自己活動を引き起こし、その事によって子どもを指さし導くこと」(岩垣攝「指導と権威」(吉本均責任編集『現代授業研究大辞典』明治図書、1987年、266ページ)とされている。

このように、指導は本来子どもへの強制とはまったく無縁のものである。引用文にもあるように、むしろ「子どもの内面にとどき内面をゆり動かし、共感と意欲を呼び起こし、「子どもを意欲づけ自己活動を引き起こす」ものでなければならない。

(中略)

子どもたちが自らの課題を達成しようと自発的、主体的になり、「私、やりたいよ。ねえ 先生、教えて」、「ぼくに教えてよ」と心の底からの要求になったとき、保育者や教師の時機にかなった的確な指導がおこなわれたなら、たとえその課題が少し難しかりょうと子どもたちの瞳や顔は輝き意欲を表わして活動をする。まさにその時に私たち保育者や教師と子どもたちとの気持ちがひとつとなり、「教える喜び」や「伝える喜び」を感じる。そして、子どもたちは、「知る喜び」や「学ぶ楽しさ」、保育者と気持ちがひとつになった喜びを経験する、保育者・教師のこの「教える、伝える」という行為と、子どもたちが「知りたい、学びたい」という行為を含めて私たちは保育・教育における「指導」という行為と考えている。

勅使千鶴『子どもの発達とあそびの指導』ひとなる書房 P.94~P.98より

ここに書かれているように強制的に何かをさせることは、そもそも「指導」ではありません。本当の「指導」というのは、子どもの内面をゆり動かすものであり、子どもの側からやりたい、知りたいという気持ちを引き出し、ちょうどそのタイミングを見計らって必要なことを教えたり、経験させたりすることをいうということなのです。

子どもたちの心をゆり動かすための働きかけ、共感と意欲を呼び起こし、意欲を持って取り組むことができるように導く。そんな「啐啄同時」と同義の「指導」について、今後も職員とともに考えていきたいと思えます。